

# KDKニュース



## KDK三つの原則

1. 開拓伝道であること
2. 教会を建てあげること
3. 聖書信仰に立つ、教団、教派との協力

## 国内開拓伝道会

発行人 中島 秀一  
〒352-0011  
埼玉県新座市野火止4の8の28  
電話 048-202-1500  
FAX 048-202-1501  
振替 00140-6-57493  
No.129 2021年 9月

## 「開拓伝道者の基本」

KDK委員 岸尾 光



「私はあなたの仰せの道を走ります。あなたが私の心を広くしてくださいからです」

(詩篇一九・三二)

八月六日にKDK主催の「開拓者の集い」がオンラインで開催され、「コロナ禍においてこそ、霊的基本に立ち返ることが求められているのではないか」との提言がありました。その基本は、私自身の開拓伝道の経験と、KDKの運営に関する中で私が開拓伝道者から学んだことと共通しています。その中から三つだけ共有させて頂きます。

みことばを学ぶ喜び 多くの先生方の共通点は、人を教える前に、自らがみことばを学ぶ喜びを知っているという点です。冒頭の聖句にあるような「みことばの広い道を、キリストの栄光の命を受けて自由な心で走っている」。そんな経験をしているようです。

KDKの前会長の泉田昭先生は原語から聖書を翻訳し説教の準備を始めていました。先生の説教を聞きながら、その作業が喜びとなっていたことが生き生きと伝わってたことを、三〇年近く経った今でも鮮明に覚えています。みことばを学ぶ喜びが新鮮さを保つために、自分にとって相応しい方法を見つけられる開拓伝道者は幸いな人と言えるでしょう。

祈りによる主との交わり かつてKDKのサポートを受給した先生が、KDKのセミナーのゲストとして次のような証しをして下さいました。「ある牧会の行き詰まりから『早天祈禱』をするようになり、祈りの中で主からのお取り扱いを受け、それと共に主によって働きが前進したことを実感した」と。その先生の輝かしい表情に私も励まされました。開拓伝道には労苦がつきものです。コロナ禍においてはなおさらかもしれません。しかし、神様は労苦をきっかけに祈りへと、そしてご自身との交わりへと私たちを導いて下さることもあるでしょう。「私たちは、何をどう祈ったらいいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださいのです。」(ローマ八・二六)

霊的導き手との関わり 実を結ぶ教会になるまで働きを継続している先生方の陰には、良き指導者の存在があるようです。開拓者には困難な働きを続けるために召命の確信と共に「召命に応えて何が何でも、誰が何といってもやり抜く決意」が欠かせません。それゆえ意固地になったり独りよがりになる危険もあります。ですから私も経験しているように、働きの困難さや挫折を理解し受容しつつ、修正すべき点を的確に判断し、忍耐をもって継続的に指導してくれる導き手が必要なのでしょう。この件に関してE・H・ピーターソンは、六世紀のキリスト教文書を基に「長い間、牧師が自分の霊的導き手を持つことは、職務として当然のことだと考えられてきた」と述べています。

(新座志木バプテスト教会 牧師)

## 「KDKK開拓者の集い」報告

八月六日、十時から三時まで、オンラインにてKDKK開拓者の集いが開かれました。種々の形で開拓に関わる約30名の方々が集まり、第一部の午前は、「コロナ禍での教会形成」、第二部の午後は、「開拓教会におけるリーダーシップ」をテーマに学び合いと分かち合いをいたしました。

### 「コロナ禍だからこそ、進めたい教会形成」

第一部担当・報告 KDKK委員 福井 誠  
コロナ禍において教会が直面した、種々の課題について共に考えました。一つは、コロナ禍のみならず社会の危機的な事態に、教会はどのように初動すべきかという課題です。振り返れば、今回は、ジャーナリズムに振り回された地に足のつかない対応もあったのではないかとという声もありました。しかし現場は待たなし、多くの諸教会は、現場でそれぞれ最善の対応を考えなくてはなりませんでした。大事なことは、常識感覚によってメディア情報を参考とし識別しながらも、聖書的信仰からこれに対応していくことでしょう。

たとえばキリスト者にとって礼拝は継続を要することでしたが、神がこれを妨げられるのか、ように見えるのは、どのような理由によるものか、を考えることです。実際、私の場合、コロナ禍にあつてまず思い起こされた聖書のことばは、イザヤ一・十一―十六やエレミヤ六・二〇、そしてエゼキエル二〇・十九、二〇の預言のことばでした。礼拝が礼拝として機能していたのか、その本質的な在り方を問われた思いがしました。確かに礼拝において決定的に重要なのは、礼拝において自分がどのように感じるか、どれほど満足するか、という

ことよりも、神が私たちの礼拝を受け入れてくださっているかどうかにあります。

そのような意味で、否応なしに導入せざるを得なかったオンライン礼拝も、これを単なる一時的な手段として、あるいは宣教の拡大の機会として考えるのではなく、オンラインといえども、みことば、信仰告白、感謝、そして献身において、場を違えながら皆が一つ心になって献げる、まことの礼拝となっているかどうかが重要でしょう。

こうしてコロナ禍は、宣教、交わり（神の家族としての共同体）、牧会的・聖餐的訪問など、種々の教会の実践を、その聖書の本質から振り返る機会を与えてくれました。そして、初代教会の本質に立ち返る、神のあわれみの時に私たちは与ったと言えます。このようなコロナ禍であればこそ、普段は見えにくい自分たちの実践が、神の光に照らされて見えてくるものがあります。開拓は霊的基本が大事です。霊的基本をしっかり据え、豊かな実りある働きをしまりたいたいものです。

### 「開拓教会で機能するリーダーシップを考える」

第二部担当・報告 KDKK委員 大橋 富男  
第二部では、開拓教会で機能するリーダーシップについて考えました。まず、リーダーシップとは何か、また、聖書が教えるリーダーシップとは何かを取り上げ、それを開拓教会に適用しました。すなわち、一、誠実であること。二、明確なビジョン（目標）を掲げること。三、教会内の円滑な人間関係。四、信徒を動員することです。

特に、明確なビジョンを掲げることについては、発題者の例を参考に、過去から未来へ、そして現在を見ることの大切さと、そこに至るまでの道筋を示すこと、そして、それが神から与えられた使

命だと信じて、忍耐をもって取り組むことの大切さが語られました。

また、開拓教会においては、円滑な人間関係が特に重要なポイントであり、牧師が率先してキリストの愛をもって教会員を受け入れ温かい心を示すと同時に、神の家族として教会が互いに交わりを持つために、小グループによる交わりが有効であることが示されました。

また、信徒を動員していくことについては、信徒に奉仕を強制するのではなく、信徒の賜物を見極めて個人的にゆだねていくことの必要性や、特に開拓教会では組織をできるだけシンプルにし、必要なことは定期的なミーティングを開きそこで祈ることが効果的ではないか、また、教会を建てるというテーマで外部講師を招き修養会を開くのも効果的であるという意見が出されました。

発題後、六つのグループに分かれ約三〇分間のディスカッションを行い、最後に各グループでの話し合いを分かち合いました。置かれている所は違っても同じよう



閉会前の参加者と記念のスクリーンショット

な問題を抱えている牧師、リーダーが、教会の働きの前進のために共に祈り、実際の、具体的なテーマで分かち合うことで、互いに励まされました。このような機会を与えてくださった主に感謝します。